

蘇州における李延齡の伝説について

滝 野 邦 雄

はじめに

顧祿（字は總之、一字は鐵卿、または總之、号は茶磨山人。江蘇吳縣の人。嘉慶二十二年（一八一七）の吳縣の諸生（光緒丙午春正月鐫竣『蘇州府長元吳三邑諸生譜（扉は『國朝三邑諸生譜』）』卷五・十一葉による）。嘉慶元年（一七九六）頃～？）は、蘇州山塘の白公橋近くにある李延齡祠について、「李侍郎祠は、〔山塘の〕白公橋にあり、清初の平治江南刑部左侍郎の〔李〕延齡¹⁾を祀り、額には、「再活吳民」と曰う」と述べて、つぎのような伝説を伝える。

李侍郎祠は、〔山塘の〕白公橋に在り。國朝の平治江南刑部左侍郎の〔李〕延齡を祀る。額に「再活吳民」と曰う。按ずるに、順治二年、大兵 江南を平定し、檄を各郡に傳え、安撫使の黃家鼎を遣りて蘇に至らしむに、明の監軍の楊文驄の殺す所と爲る。朝廷 震怒し、都督の李延齡・總兵の土國寶²⁾を差^{つか}わし露刃して南下さす。〔楊〕文驄 宵逃す。百姓 各々「順民」の二字を門に書す。剃髮の令の下るに迫り、福山の副總の魯之瑛 首先に拒むを倡し、郷兵 四起す。時に太湖の盜の赤脚（はだし）の張三なる者有り、隅^{たの}を負みて劫掠す。〔それが〕突起（突然現れる）して之に應じ、城中の人 遂に死すること算える無し。〔土〕國寶 必ず屠城せんと欲す。而して〔李〕延齡 亂民の多くは脅従に由るを知り、兵を加えるを欲せず。且つ城の西北の居民 稠密なるを探知す。〔土〕國寶と鬪二つを分か^かつ。鬪は俱に東南と寫く。〔土〕國寶 〔東南の鬪を〕拈（はさみ取る）り得て、盤門より屠りて飲馬橋³⁾に至る。關帝の馬を横にして橋上に立つを見て、始めて跪きて止まる。蓋し像は係れ先夕に醉漢の橋上に昇^{かつ}ぎ至すと爲す者なり。〔李〕延齡 刃を封じて擧げず。吳人 之を德とし、因りて像を塚^{つく}に祠を立て、並びに坊（牌坊）を建つるを爲す、と（道光二十二年（一八四一）刻『桐橋倚棹錄』卷四・祠宇）。

順治二年（一六四五）、清朝の軍隊が江南を平定し、檄（ふれぶみ）を各郡に伝えた。安撫使の黃家鼎を蘇州に派遣したところ、明の監軍の楊文驄によって殺害されてしまった。清朝政權は激怒して、都督の李延齡と總兵の土國寶とを差し向け、軍勢を引き連れて南下させた。楊文驄は、夜に紛れて遁走し。人々は、「順民」の二文字を門に書いた。一ヶ月後、剃髮令が下り、福山の副總の魯之瑛が最初に拒否し、各地の郷兵が立ち上がった。その時、太湖の盜賊の「赤脚（はだし）の張三」というものが、險所をたのんで掠奪を行っていた。それが突然現れて、その反抗に応じたために、蘇州城内の人たちは、とうとう多く亡くなってし

まった。[怒った] 土國寶は、蘇州を屠城しようとした。ところが、李延齡は、反抗に参加した亂民の多くは脅されたためであることを知り、武力を加えたくなかった。その上、蘇州城内の西北は住人が多いことを察知した。そして、土國寶とくじ引きをして屠城する場所を決めた。ただし、李延齡は、くじ引きには、両方とも「東南方面」と書いておく。土國寶は、「東南方面」を引き当て、西南の盤門から屠城を開始し、飲馬橋までやってきた。すると、飲馬橋に關帝が馬の横に立っているのを見て、跪いて屠城を止めた。おそらく關帝の像は、前日の夕暮れに、酔っ払いが飲馬橋に置いておいたのであろう。李延齡のほうは、刃をむけなかった。蘇州の人たちは、それを徳として、像をつくって祠を建て、さらに牌坊を作ったのである、という。

- ✓ 1) 李延齡(漢軍正藍旗人。李永芳の次子。字は叔達)の「延齡」は、初名である。十二歳の時に清・太祖から「率泰」の名を賜り改名する。ただし、拙稿では、初名の李延齡を用いる。当時の史料が「李延齡」とするからである。『清史列傳』などによると、以下のような経歴である。なお、蘇州滞在期間は、順治二年(一六四五)六月四日から、順治二年八月一日までの、閏六月をはさんだ三か月である。

十二歳、入侍し、太祖から「率泰」の名前を賜う。

十六歳、宗室の女性を妻とする。

太宗の察哈爾・朝鮮・錦州の親征に従軍する。

崇徳八年(一六四三)、貝勒阿巴泰に従って明を遠征し山東に至る。功績があり、副都統に抜擢される。

順治元年(一六四四)正月、刑部參政(侍郎)を授けられ、副都統を兼ね、兵を率いて錦州に駐屯する。

四月、多爾袞に従って山海關に入り、李自成を破る。都統の金礦とともに天津を招撫する。そして、寧遠の駐防兵を率いて山東・河南を平定する。

順治二年(一六四五)、豫親王多鐸に従って、流賊を潼關に破り、南征を始め、揚州・江寧を下す。精兵三百を従えて、蘇州・松江にむかい、通過した都市をすべて撫定す。ただ、江陰だけは抵抗したので、攻撃して平定する。

三年(一六四六)、端重親王博洛に従って杭州を下し、福建を平定する。世職を授かり二等輕車都尉となり、一雲騎尉を兼ねる。

六年(一六四九)、一雲騎尉を加えられる。

八年(一六五一)閏二月、吏部侍郎に調せらる。

三月、弘文院大學士を授かる。

七月、恩詔赦款を誤増し、巧飾して誑奏したことで、免職となり世職を降して騎都尉となる。そして恩詔に遇って一雲騎尉を加えられる。

十年(一六五三)六月、兩廣總督となる。

十三年(一六五六)、太子太保を加えられ、浙閩總督に調せられる(二月庚午)

十五年(一六五八)七月二十九日、浙閩總督を浙江總督と福建總督とに分けたことにより、福建總督となる。

十六年(一六五九)、羅源縣の敗逃についての審議不十分によって、世職を革去される。ただし、福建總督としてはそのまま。また、革任を追論されるも、寛免される。

康熙元年(一六六二)から二年(一六六三)五月にかけて鄭成功の軍を福建から追い出す。その功績で秩一品を加えられる。

二年(一六六三)六月、病のため辞任を求める。六月二十九日に認められるが、職務はそのまま。

四年(一六六五)三月、再び病のため辞任を求める。

五年(一六六六)正月、在職のまま卒す。忠襄の諡を賜う。

蘇州出身の顧頤剛（一八九三年～一九八〇年）は、この『桐橋倚棹錄』を引用したうえで、つぎのように述べている。

亡國の慘狀 一に斯に至る。畏る可し、恨む可し。清兵の屠城は、飲馬橋に至り、關帝顯聖を見て止む。[このことは] 予（顧頤剛） 幼年より之を熟聞す。但だ兵を收むる者は八大王と爲すを知るも、未だ其の人を詳らかにせず。今、此れを讀むに、乃ち李延齡と土國寶なるを知るなり。清兵の屠城する所以は、黃家鼎の殺さるるの仇が爲め、魯之璵と赤脚の張三の領導するの剃髮を拒絶するの義師を鎮圧するが爲めなり。其の兵を統ぶる者、土國寶は暴にして、李延齡は仁なり。故に吳人 其の徳を戴き之を祀る。楊文驄の黃家鼎を殺すの事は、亦た昔の未だ聞かざる所なり。易代の際、事 禁諱多し。幸いに顧[祿]の記すを得、茲の大略を傳う。亦た蘇州史上の一大事なり（『顧頤剛讀書筆記』・第八卷（上）・「壬寅冬日雜鈔」・「楊文驄殺黃家鼎與李延齡救蘇州人」条・六一四四頁・聯經出版事業公司一九九〇年出版）。

清朝の軍隊による屠城が飲馬橋の關帝像を見て止んだという伝説は、幼いころからよく聞いていたという。また、一九三一年に出版された黃厚誠の『虎丘新志』（不分卷・「李率泰祠」条・九十六頁～九十七頁：『蘇州史志資料選輯』總第三十八輯（二〇一二年）所収による）においても、この伝説が記録されている。

現在の蘇州の人たちもこの伝説はよく聞き知っている、とのご教示を蘇州在住の文學山房

- ✓ 2) 土國寶（山西大同の人。明の總兵）は、『清史列傳』卷七十九・貳臣傳乙によると、次のような経歴である。

順治元年（一六四四）、投誠し、原官をもって録用される。

二年（一六四五）、豫親王多鐸に従って、江寧を定める。多鐸は、侍郎の李率泰（李延齡）と蘇州・松江の諸郡を招撫させる。

七月六日、江寧巡撫になる。

四年（一六四七）二月二十六日、降一級処分を受ける。（四年三月己未から五年閏四月二十一日まで周伯達が江寧巡撫）

八月、布政使の官職で江南按察司の事を管す。

五年（一六四八）五月十八日、江寧巡撫を授けられる。

八年（一六五一）十月十二日、弾劾され革職となり、畏れて自經して死す。

- ✓ 3) 光緒七年（一八八一）江蘇書局重修：同治『蘇州府志』には、「飲馬橋」の南の「關帝廟」について、つぎのように述べる。

關帝廟は、飲馬橋の南に在り。明・洪武十二年（一三七九） 建つ。國朝の咸豐十年（一八六〇） 毀たる。

同治七年（一八六八） 重建す（光緒八年江蘇書局重修：同治『蘇州府志』卷第三十六・壇廟祠宇一・十一葉・「關帝廟」条）。

咸豐十年（一八六〇）に破壊されたのは、太平天国軍の蘇州占拠とかかわるのではないかと推測される。

なお、『吳城日記』には、順治二年（一六四五）十月二十九日の「飲馬橋」の状況をつぎのように伝える。

〔順治二年十月二十九日〕 予の足迹 葑門に及ばざること將に半載（半年）にならんとす。是に至り、往きて飲馬橋畔を見るに民居 悉く毀たる（『吳城日記』卷中・「乙酉（順治二年）十月二十九日」条・二二三頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

「飲馬橋」付近もかなり被害を受けていたようである。

舊書店の江澄波氏からいただいた。

拙稿では、李延齡が、順治二年（1645）に蘇州で行われようとした全城虐殺を部分的であれ止めさせたという伝説について考察を行なうつもりである。そのため、（1）で清政権の立場から書かれた地方志はどのように記録しているのか、（2）で当時蘇州近辺の地域には蘇州城内の様子はどうか伝わっていたのかを考え、（3）で実際に城内にいた人物の伝えるところを検討し、（4）でなぜ伝説と李延齡とが結びついたのかを検討してみたい。

（1）

李延齡が蘇州城の虐殺を部分的にも止めたという伝説は、乾隆年間にはすでに形作られていた。顧公燮（字は丹午、号は澹湖・擔瓠。乾隆十三年（一七四八）の呉縣の諸生〔光緒丙午春正月鐫竣『蘇州府長元吳三邑諸生譜（扉は『國朝三邑諸生譜』）』卷四・七葉による〕は、『丹午筆記』において、つぎのようにいう。

……已にして湖寇の部する所 獲われ下獄する者有り。陳湖の師 力士を伏して之を劫^{うば}い、城樓を焚き、城内の士民 之に應ず。〔順治二年（一六四五）〕閏六月十三日、葑門に突入し、一時汹汹（多くの人が騒ぎ立てる）たり。撫・按・府・長・吳の五署を焚く。土公（土國寶） 瑞光寺浮屠に避け入る。官兵 勇を奮いて殺出し、開炮（炮彈を発射する）して血路を成す。〔魯〕之璵 千人を率いて入城し、大兵と戦う。衆 潰え、力 支うる能わずして死し、全軍 殲^{ほろ}ぶ。義民の韋志斌なる者有りて、亦た同じく死す。〔蘇州の〕六門 閉じられ、城に留まる者 死すること算うる無く、道路の踐死する者相枕藉（多く折り重なる）たり。未だ幾ばくならずして、都督の李公（李延齡） 至る。土公（土國寶） 必ず屠城せんと欲す。李公（李延齡） 西北の民居の稠密なるを知り、土公（土國寶）と鬪を分かち、俱に東南の二鬪^かを寫く。土公（土國寶） 拈得し、盤門より屠りて飲馬橋に至る。橋畔に關公像有り。民 橋上^{かつ}昇ぎに至し、兵の神像を畏れんことを冀う。萬が一に金が鳴り、忽ち關公の馬に上り刀を提^もち、橋面に立つを見、人馬 俱に跪きて止まる。〔關〕公 誠に護國佑民なるや。今に迄ぶまで飲馬橋邊の香烟の絶えざるは、固より宜なるかな。李公 刀を封じて舉げず。呉人 祠を虎丘山塘に立て、「德崇宇宙」を建て、以て不朽を志す、云う（『丹午筆記』二十七 平定姑蘇始末）。

蘇州南東にある陳湖の暴徒のなかに、逮捕されて下獄したものがでた。蘇州城の南東にある陳湖を拠点とした暴徒たちは、力士を蘇州城内に潜伏させて、これを奪いかえし、蘇州の城門や樓閣を焼いた。蘇州城内の人たちもこれに応じた。順治二年（一六四五）閏六月十三日に、蘇州城南東にある葑門に突入し、一時大いに騒ぎ立てた。巡撫・按察使・蘇州府・長洲縣・吳縣の役所が炎上した。土國寶は、盤門そばの瑞光寺に難を逃れた。官兵は、勇を奮って戦い、発砲して血路を開いた。陳湖の魯之璵は、千人の無頼の徒を率いて入城し、清朝の軍隊と戦っ

た。しかし、千人の無頼の徒は潰えて、支えることができず戦死し、全軍は滅ぼされてしまった。義民の韋志斌というものがいたが、同じく戦死してしまった。蘇州の六つの門は閉鎖され、城内に乱入して留まっていた者たちは、どのくらい亡くなったか数えることができないくらいであり、道路では踏み殺されたものが多く折り重なっていた。しばらくして都督の李延齡が到着した。土國寶は、絶対に蘇州城内を屠城したいと考えた。李延齡は、城内の西北部の人口が密集していることを知り、土國寶と虐殺の場所を決めるくじを作り、ふたつともに人口の密集していない東南と記しておいた。土國寶は、東南のくじをひき、盤門より北に虐殺を行なって飲馬橋にいたった。飲馬橋に關公像が置いてあった。ひとびとが昇（かつ）いで橋に置いて、兵士がそれを見て畏れることを願ったのである。すると意外にも金が鳴り、突然に關公が馬に乗り刀を手に持ち、飲馬橋に立つのが見えた。兵士たち跪きて止まってしまった。まことに關公の護國佑民ぶりはありがたいものである。今に至るまで、飲馬橋の關帝廟の香烟が絶えないのはほんとうに理由があるのである。李延齡は刀を取めて振り上げなかった。蘇州の人たちは、李延齡の祠を虎丘山塘に作り、「徳崇宇宙」と記した牌樓を建て、不朽の業績を記録した、というのである。

ここには、抽籤をして屠殺の場所を定めたことや、關公の像を見て虐殺を思いとどまったということが記されている。そして、陳湖の暴徒たちが、仲間を救い出すために、順治二年（一六四五）閏六月十三日に蘇州城に乱入し、それを清朝の軍が退ける。その掃討戦のときに虐殺が行われようとした、という。

では、清政権の立場から書かれた地方志には、どう記されているのだろうか。康熙三十年（一六九一）に刻された康熙『蘇州府志』は、つぎのように伝える。

〔順治二年（一六四五）五月二十九日に明の監軍の楊文驄が清政権から派遣された黄家鼎を捕らえて殺害してから〕越えて三日、都督の李延齡・總兵の土國寶 露刃もて南下す。〔楊〕文驄の兵 逃（逃）れ散去す。〔順治二年（一六四五）〕閏六月十三日、湖寇（陳湖を拠点とする盜賊） 城中の歸順する者を讐とす。又大いに亂して官署を焚毀し、城中 幾んど屠戮さる。……督撫（都督の李延齡・總兵の土國寶） 招安を懸示し、〔黄家鼎とともに清政権から派遣され、危うく楊文驄から逃れた蘇州出身の周〕荃 毎に之に左右し、城中の人を全活（命を救う）すること數うる無し（康熙『蘇州府志』卷第八十一・雜記二・四十五葉～四十六葉）。

順治二年（一六四五）五月二十九日に明の監軍の楊文驄が清政権から派遣された黄家鼎を捕らえて殺害してから三日後、清政権の都督の李延齡・總兵の土國寶が軍勢を引き連れて南下してきた。順治二年（一六四五）閏六月十三日、蘇州城の南東にある陳湖を拠点とした盜賊たちが、蘇州城内の清政権に帰順した人たちを仇とした。また、おおいに城内を混乱させ役所を焼き払い、城内の人たちはほとんど殺戮されてしまった。都督の李延齡・總兵の土國寶は、暴徒たちに投降を呼びかけた。さらに、黄家鼎とともに清政権から派遣され、危うく楊文驄

から逃れた蘇州出身の周荃が、つねに二人の側にいて、数えきれないくらい蘇州城内の人の命を救った、という。

乾隆十年（一七四五）に刻された乾隆『吳縣志』は、つぎのように伝える。

〔順治二年（一六四五）〕閏六月十三日、令を下して剃髪せしむるに。閭閻（平民）震恐（驚恐）す。湖寇（陳湖の盜賊）機に乗じて葑門に突入す。〔湖寇は〕頭 白布を紮^{まと}い、官署を焚き、官吏を殺し、庫藏（倉庫）を刼^{かす}む。亂民 之に従う。城中 鼎沸（沸き返る）す。兵部侍郎の李延齡・巡撫都御史の土國寶 府學に駐居し、營を南園に列し、瑞光寺浮圖に登り、賊勢を瞭望（遠望）し、兵を出して之を追う。衆 遂に星散（四散）す。男女 争^{おし}いて擠け出城し、死する者 算える無し。鄉村に避入れば毎に兵慘^{こうむ}を罹る。周荃なる者有り、蘇人なり。授けられて按撫（按察使）と爲り、民を招きて歸城させ、生全（命を救う）する所多し。〔李〕延齡・〔土〕國寶も又た「勸民歌」を作り、遠近に諭す。〔そのおかげで〕民心 始めて安んず（乾隆『吳縣志』卷之四十一・弭變・二十二葉）。

順治二年（一六四五）閏六月十三日、剃髪令が出されると、人々は恐れおののいた。蘇州の南東にある陳湖を拠点とした盜賊たちは、その機に乗じて蘇州城南東の葑門から突入した。盜賊は、頭に白布をまとい、役所を焼き払い、官吏を殺害し、倉庫を奪った。城内の亂民もこれにしたがった。城内は沸き返った。兵部侍郎の李延齡と巡撫都御史の土國寶は、東南の府學に留まり、軍を南園（滄浪亭の南方。今の養蚕里一帯）に配置し、東南角の瑞光寺の塔に登り、賊の勢いを遠望し、軍勢を出して、追い払った。盜賊たちは四散した。蘇州の男女は、先を争って城外に出て行き、数えきれないくらいの人々が亡くなった。また、村里に避難しても、兵禍を被った。蘇州出身の周荃という人物がいた。清政權から按撫（按察使）の職を授けられ、人々を蘇州城内に戻らせ、多くの命を救った。李延齡と土國寶も「勸民歌」を作り、遠近に告知した。そのおかげで、民心ははじめて安定した、という。

光緒七年（一八八一）江蘇書局重修の同治『蘇州府志』では、つぎのようにいう。

世祖の順治二年（一六四五）六月乙卯（四日）、王師 蘇州に至る。士民 争いて迎え降る。屬縣 次を以て皆な下る。豫王 既に金陵を定め、檄^{ふれふみ}を東下（東行）に傳え、吳縣の人の周荃・副前鴻臚寺少卿の黃家鼎 郡に入れ安撫さす。〔黃〕家鼎 故明の監軍の楊文驄の潰兵に遇い、殺さる。大軍 至り、〔楊〕文驄・兵 逃げ去る。士民 各々「順民」二字を門に書き、争いて羊・酒を持して迎候（出迎える）す。〔順治二年（一六四五）〕閏六月癸巳（十三日）、薙髮令 下り、湖（陳湖）寇 葑門に突入す。〔湖寇は〕頭に白布を纏い、亂民 之に従い、一時洶洶（多くの人が騒ぎ立てる）たり。兵部侍郎の李延齡・巡撫都御史の土國寶 兵を遣りて、追捕（追跡逮捕）し、立即（即刻）解散せしむ。而して城中 幾んど屠戮に遭わんとす。〔土〕國寶 「勸民歌」を作り、遠近に招諭（敵対する者への帰順の勧め）す。〔周〕荃 毎に進説（進言）し存活（命を救う）する所多し。吳江の吳易^{ママ}⁴⁾等 太湖に出沒し、崑山の王佐才等 嬰城（城内に立てこもる）し

て拒守するも、咸な時に應じて平定さる（光緒七年江蘇書局重修：同治『蘇州府志』卷二十八・軍制・國朝・七十一葉）。

順治帝の順治二年（一六四五）六月四日、清政権の軍が蘇州にやってきた。人々は、争って迎えて投降した。蘇州に属する諸々の縣も順次下っていった。豫王は、金陵（南京）を安定させ、告知文を伝え、呉縣出身の周荃と副前鴻臚寺少卿の黃家鼎を蘇州に派遣して慰撫させた。ところが、黃家鼎は明の監軍の楊文驄の敗残の兵のために殺されてしまった。その後、すぐに清政権の大軍がやってきて、楊文驄とその軍は逃げ出してしまった。人々はそれぞれ「順民」の二字を門に書き、争って羊や酒を持って出迎えた。順治二年（一六四五）閏六月十三日、薙髮令が下り、蘇州城南東にある陳湖を拠点とする盜賊たちは、蘇州城南東の葑門から突入した。陳湖の盜賊たちは、頭に白い布をまきつけ、城内の亂民もそれに参加し、一時多くの人が騒ぎ立てる状態となった。兵部侍郎の李延齡と巡撫都御史の土國寶は、軍を派遣し、追跡逮捕し、即刻解散させた。そうして、蘇州城内は屠戮されようとした。土國寶は、「勸民歌」を作り、遠近に帰順を勧めた。周荃は、いつも進言して多くの命を救った。呉江の吳易^{ママ}などは太湖に出没し、崑山の王佐才などは崑山の城内に立てこもって拒守したものの、すべて時に應じて平定されていった、という。

康熙『蘇州府志』では、陳湖の暴徒が「蘇州城内の清政権に帰順した人たちを仇とした」ことから、乾隆『吳縣志』では、陳湖の暴徒が「剃髮令が出された恐怖心」に乗じて、同治『蘇州府志』も「薙髮令 下り、湖（陳湖）寇 葑門に突入す」とあるので、陳湖の暴徒が蘇州城内に乱入してきた時に、暴徒によるのか、清の軍隊によるのかははっきりしないが、多くの人が亡くなったと記している。もっとも、清代に編纂された地方志という性格上、清政権に

- ✓ 4) 吳易の名の「易」について、葉廷瑄（字は紫陰、号は調生・愛棠・苕生・蛻翁・蛻廬病隱・十如老人。蘇州吳縣の人。乾隆五十七年〔一七九二〕～同治八年〔一八六九〕）は、『鷗陂漁話』に Fitzgerald のように述べ、「易（よう）」ではなく「易」が正しいとする。

國初、[わが]家の仲韶先生（葉紹袁：字は仲韶、号は。吳江の人。天啓五年乙丑科（一六二五）三甲四十六名の進士）居を光福山に避く。著わす所の『甲行日記』（卷二）に一條有りて云う「丙戌六月十七日壬辰、山中に遙かに日生（吳易）の凶問を傳う。初めは未だ敢えて心信せず。程 云う程とは淩姓の小史なり。『甲行』日記に見ゆ、營中の人の言なれば確なり、と。夏至の日に曾て撰著を爲し、大壯の夬に之（ゆ）くに遇う。[それは大壯卦の變爻である六五の爻辭の]「六五、羊を易に喪う」なり。今は未月なり。「易」は則ち其の名なり。異なるかな」と。『甲行』日記の眉に無名氏の按語有りて云う「吳日生の名は、『明史』に「易」に作る。而して他書は、或いは「易（よう）」に作る者有り。今、先生（葉紹袁）が「六五、羊を易に喪う」とするを以て證と作せば、則ち「易」に作ることに疑い無し。先生（葉紹袁）と日生（吳易）と同邑・同時にして、書札の往還有れば、必ず証を傳うる無し。且つ「易（よう）」・「易」の二字は、分別 甚だ微なり。傳抄・翻刻 淆混し易し。今 確證有れば、自ずから應に此れに據りて以て「易（よう）」に作るの誤を定むべし」と。此の書は、錢映の江綺より借閱す。按語は疑うらくは即ち[錢]映の題する所ならん。余（葉廷瑄）謂う、『說文解字』（卷第九下・「易」）に引く秘書に「日月爲易」と説けば、則ち[吳易の]名は「易」にして、字は「日生」なり。義 蓋し諸を此れに取る（同治九年『鷗陂漁話』卷二・十一葉～十二葉・「吳日生名」条）。

よる虐殺にかかわる李延齡の伝説については記されていない。

ただし、同治『蘇州府志』になると、李延齡が蘇州城の虐殺を部分的にも止めたという伝説をふまえてのことかと考えられるが、「城中 幾んど屠戮に遭わんとす」との記述が挟み込まれている。そして、三種の地方志ともに李延齡ではなく、蘇州出身の「周荃」が人々の命を救ったと述べる。この周荃が人々の命を救ったということは、順治二年（一六四五）当時蘇州城内にいた『蘇城紀變』の著者も伝えている。

是の日（順治二年六月四日）、主帥（清の指揮官）兵を駐^{とど}めて社壇（「平江圖」には、盤門内と天慶觀の東北と二つの「社壇」が記される。ここは、盤門内のものを指すと考えられる）に在り。云う、屠城の意有りるも、周子靜（周荃）の力めて之を解くに頼りて止む、と（『蘇城紀變』不分卷・二葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

なお、陳湖の暴徒による役所の攻撃によって、吳縣の知縣の薛應琦、吳縣の主簿の鍾學經と吳縣の典史の陸士遜が亡くなっている。

薛應琦 順天大興縣の人。監貢。順治二年、丹陽主簿を以て本縣の縣丞に陞る。王師（清の軍）蘓州（蘇州）を定め、部院 吳縣知縣を委任す。閏六月十三日に、寇變に遇いて被難（遇難して亡くなる）す（乾隆『吳縣志』卷之三十五・本朝吳縣職官年表・一葉）。

鍾學經 浙江鄞縣の人。例監。順治二年六月、部院 [主簿を] 委任す。閏六月十三日に、寇變に遇いて被難（遇難して亡くなる）す（乾隆『吳縣志』卷之三十五・本朝吳縣職官年表・一葉）。

陸士遜 太倉州の人。吏員。順治二年六月、部院 [典史を] 委任す。閏六月十三日に、寇變に遇いて被難（遇難して亡くなる）す（乾隆『吳縣志』卷之三十五・本朝吳縣職官年表・一葉）。

ではつづけて、この陳湖の暴徒の乱入は、当時蘇州城外の人たちにどのように伝わったのかを検討してみよう。

(2)

①『研堂見聞雜記』

蘇州の状況が太倉沙溪にはつぎのように伝わる。太倉沙溪の王家禎（字は予來。太倉沙溪の人。崇禎九年（一六三六）の副榜）の『研堂見聞雜記』はいう。

蘇郡の難頭するや、閏六月の十二日を以てす。令 既に下り、民 惴惴たり。已にして楊文驄なる者は、向に嘗て黃家鼎を殺し、庫を劫^{うば}い[逃] 走し湖藪の間に盤桓（徘徊）し、^{すき} 甕を觀て動く。奸作四人有りて、府獄に繋がる。難頭の令 下り、[楊文驄は] 以爲らく、民 必ず生心（異心を抱く）せん、是れ乗ず可きなり、と。疾驅して至り、大呼狂叫し、

居民を號召（召喚）し、薪を各城門に聚め、穴ほりて之を入れしむ。城内の民も亦た狂呼して應じ、各々白梃（大きな木製の棍棒）を執る。[その数は]、共に萬人を數う。公廨（官署）府舍 火を擧げざるは無し。燄煙 目を蔽う。城内 亂れ、以爲らく大兵（清朝の軍隊）旦夕に盡く、と。大兵（清朝の軍隊）變を聞きてより、即ち府學に移駐し、劇飲（痛飲）すること自如たりて、聞かずと爲すが如き者なり。諸々の狂徒 提兵（軍隊を率いる）して、其の所に至れば、張滿（弓を張る）して以て待つを見て、亦た逡巡して敢えて動かず。但だ肆に焚呼を行なうのみ。是の如き者一日。楊〔文驄〕府獄の四人を劫^{うば}い去る。城内の人も亦た氣盡き應ずる無し。李侍郎（李延齡）城民を屠^ほらんと欲す。軍門（巡撫の尊称）の土國寶 力めて之を争う。先ず出示（告示）して、居民をして速やかに移して禍を避けるを期う。十六日に至り、三十六騎を以て北察院より殺して南し、葑門に及ぶ。老穉 孑遺（殘存）無し。而して蘇城 始めて定まる（『研堂見聞雜記』一卷・六葉・「痛史」第五種所收本・辛亥（一九一一年）十月初版）。

蘇州の薙髮の命令は、閏六月十二日であった。命令がすでに下されると、人々は恐れおののいた。楊文驄は前に清政權から蘇州に派遣された黃家鼎を殺し、金蔵のものを掠奪して逃げ、湖蘆のあたりを徘徊し、隙を見て行動していた。間諜四人が、蘇州府の監獄に繋がれていた。薙髮の命令が下り、楊文驄は、「人々は異心を抱くであろう。これに乗ずるべきだ」と考えた。そこで、急いで蘇州に行き、大呼狂叫して住民を呼び出し、薪をそれぞれの城門に集めて、穴を掘ってそれを放り込ませた。城内の人々も狂呼して応じ、それぞれ大きな木製の棍棒を手にした。その数は、すべて萬人にもなった。城内の官庁は、燃やされ、焰と煙が目を蔽った。城内は混乱し、清朝の軍隊はすぐに滅ぼされると思われた。清朝の軍隊は、暴動が起こってから、南西にある府學に移動し、いつものように痛飲し、暴動のことは聞かなかったようにしていた。諸々の狂徒は兵を率いて、清朝の軍隊の駐留所に往くと、清朝の軍隊が弓を張って待機しているのを見て、逡巡して動こうとしなかった。ただ、勝手に火をつけ叫ぶだけであった。このようなことが一日続き、楊文驄は監獄に繋がれていた四人を奪還していった。また、城内の人たちも、張りつめていた氣力が尽き、対応しなかった。こうして李侍郎（李延齡）が、蘇州城内の住民を屠殺しようと考えた。土國寶は、つとめてこれに反対した。そして、まず布告を出して、人々を移動させて屠殺の惨禍を避けるよう願った。閏六月十六日になって、三十六騎で北察院より南に向かって殺戮をはじめ、南東の葑門に及んだ。老若ともに残されたものはなかった。そして蘇州は、始めて安定した、と伝えている。

王家禎の伝えるところによると、蘇州の伝説とは異なり、李延齡が屠城を行なおうとし、それを土國寶が押しとどめ、被害を最小限に留めたとするのである。また、蘇州城の南東にある陳湖を拠点とする暴徒の乱入を、楊文驄の行ったことと伝えている。これは、李延齡と土國寶が「此の舉を察知するに、係^これ楊監軍（楊文驄）の餘孽 海寇を勾連（結託）して崇を爲す。大兵 到るの日に追剿（追撃殲滅）せん。城中の良民 必ずしも驚恐せず。但だ協

力（力を合わせて）して守城し、奸細を緝拿（搜捕）するを煩わすのみ」という告示を閏六月十四日に出している（178頁の『吳城日記』参照）ことによっていると考えられる。

②『薛諧孟筆記』

江蘇武進にはつぎのように伝わる。江蘇武進の薛栄（字は諧孟、号は歳星・米堆山和尚。江蘇武進の人。崇禎四年辛未科（一六三一）二甲三十名の進士）は、つぎのような、明朝の立場からの伝聞を記録している。

閏六月十一日、門を閉ざして剃頭す。十二日、民變あり。内外 夾撃し、重ねるに黄營（黄蜚の軍）及び楊龍友（楊文驄：字は龍友）監軍の兵を以てす。一夕の火光 天を燭し、[蘇州城の]六門 洞開す。婦女老弱を悞り傷つけること少なからずと雖も、□□（二字空格）此れより氣を喪う。十三日、勁旅 雲集し、且つ炎暑 酷烈なり。□（一字空格）馬倒れ士疲る。我 氣爽にして膽奮す。（『薛諧孟筆記』下冊・二葉・「閏六月十四日記」条）。閏六月十一日、蘇州の城門を閉ざして辮髪を結わせた。十二日、民變（市民暴動）が起こり、清の駐留軍を蘇州城内と外とから挟撃した。それに黄蜚の軍と楊文驄の軍とが加わった。夕方炎は空を照らし、蘇州の六門は大きく開かれた。女性や老若を誤って多く傷つけたが、清の駐留軍は、ここから氣力を喪失した。十三日、精銳部隊が雲集し、また猛烈な暑さになった。清の駐留軍は、馬はたおれ兵士は疲れる。しかし我が抵抗軍は、てきぱきと奮戦した。

薛栄は、剃頭を行なったために民變（市民暴動）があり、内外から攻撃し、それに黄蜚の軍と楊文驄の軍が加わったと伝える。

続けて、つぎのようにいう。

閏六月初九日、僞侍郎の李（李延齡）□（一字空格）囊を捲めて、北せんと欲す。遍く民間の金繪（金銀財物）を索むに因り、是の日、城中 闐起す。已に勁兵の婁門より入る有りて、直ちに撫院前に^{いた}抵り、其の火薬に焚（着火）す。虜 驚き避く。兵 院に入り、囊金（囊中の金）を攫い、^{うば}婁門より出で去る。民 愈々惶懼（恐懼）す。此れ十二日の門を閉ざして頭を削るの後の事なり。十三日、民 皆な屋に登り瓦を掲げ、毀器もて巷を塞ぐ。^{すべ}盡ての官署は皆な烈焰（はげしい炎）に付す。十四日、各縣の郷兵集まる。□（一字空格）騎の城を出る者は皆な之を斬る。薬を井中に撒く及び火砲・[辮髪用の]剃刀を家に藏する者有れば、搜し出し皆な斬る。十五日、黄（黄蜚）營の兵數萬 盤門に至る。之を天時と人事とに參す。皆な□□（二字空格）の殲滅さるるの兆しなり十六日記（『薛諧孟筆記』下冊・三葉・「閏六月十六日記」条）。

李延齡は、閏六月九日に財物を袋に詰め込んで、北に帰ろうとした。そこでひろく民間の金銀財物を要求したために、この九日に蘇州城内で暴動が起こった。そして抵抗軍の精銳が、北東の婁門より入り、李延齡のいる巡撫都察院に至り、火薬に火をつけた。清の駐留軍は驚いて退却した。抵抗軍は、巡撫都察院に入り、庫の金を奪い、婁門から去って行った。人々

は恐れおののいた。これは十二日の辮髪（べんぱつ）の命令が出た後のことである。十三日、人びとは屋根に登り、瓦を掲げ、壊れたもので路地を封鎖した。城内の役所はすべて火災に見舞われた。十四日、各地の郷兵が集まった。清の駐留軍の騎馬の城外に出ようとする者は、すべて斬られた。また、毒薬を井戸に投げ込んだものや火器・辮髪にするためのカミソリを家庭に置いているものがあれば、探し出して斬った。十五日、黄蜚（わうひ）の抵抗軍数万が西南の盤門（ばんもん）に到着した。これは、天の時と人の時とが合わさり、すべて清政権が殲滅される兆しである。

そして、

閏六月二十日、予（薛栄） 小歇關（こじんまりした旅舎）より榻を上陽に移す。即ち僮を遣りて五木に歸り探信せしむ。此の地の郷兵 機に乗じて暴を爲す者紛紛たればなり。[そして] 聞くに虜（清政権） 郷兵の屢しば起きるを以て蘇城の士民を屠り、復た盤〔門〕・葑〔門〕を出づ。殺掠 慘酷なり。惟だ八王子 巨艦に乗り至るに、楓橋兩岸の民 撃め盡く、と。此れ確信なり。今、李侍郎（李延齡） 東下して吳江を攻む。惟だ土總兵（土國寶）を留めて蘇に在り。土（土國寶）は固より蘇の民を曲全（不平をこらえて安全をはかる）者なり。且つ反正（まず逆から賊に附し、後に逆から官軍に帰順すること）の意有りと聞く。其の機 乗ず可きのみ（『薛諧孟筆記』下冊・三葉～四葉・「閏六月二十日」条）。

という。閏六月二十日に、清朝は、郷兵がしばしば反乱することから、蘇州の士民を虐殺して西南にある盤門と東南にある葑門から出て行ってしまった。殺戮は残酷なものであった。清政権の八王子が巨艦に乗船してやってきたところ、楓橋兩岸の人たちから攻撃されて亡くなってしまった、と聞く。これは確かなものである。いま、李延齡が吳江を攻撃している。土國寶が蘇州城内に留まっている。土國寶は、もともと蘇州の人たちの安全をはかっていた。また、明に投降するの意志を持っていると聞いている。この機会に乗ずべきである、という。

やはり、李延齡ではなく、土國寶が蘇州の人たちを保護したと伝えている。なお、李延齡について、薛栄はつぎのようにいう。

□（一字空格）安撫の李侍郎（李延齡）なる者は、尤も淫暴なり。兵の人の婦女に奸淫する者有り。李（李延齡） 曰く、我が北兵 人を殺すか、と。[そばに仕えるものが] 曰く、之れ無し、と。[李延齡がたずねるに] 人の財物を搶（うば）い取るか、と。[そばに仕えるものが] 曰く、之れ無し、但だ人の婦女に淫するのみ、と。李〔延齡〕 嘆じて曰く、此れ小事なり。[それなのに]、乃ち來りて纏擾（つきまとう）す、鞭うちて之を遣れ、と。此れより民 愈々命に堪えず。始めは其の□（一字空格）兵に望む者を轉じて、刻々と義士を望む（『薛諧孟筆記』下冊・二葉・「閏六月十四日記」条）。

李延齡というのは、もっとも暴虐であった。兵士のなかにひとの婦女を暴行するものがいた。李延齡は、われわれ清朝の兵士は人を殺したのか、といった。すると、取り調べたものが、ございません、という。李延齡が、人の財物を奪い取ったのかと尋ねると、ございません、

ただひとの婦女を暴行しただけです、という。李延齡は嘆息して、それはたいしたことではない。なのにつきまとしてわざわざ手間を取らせようとする。鞭打って放り出せ、といった。これから人々は清朝の命令に耐え切れなくなった。はじめは、清朝の軍に期待していた気持ちを変えて、常に清朝の軍に反抗してくれる義士を望むようになった、という。

③『甲乙事案』

この時期、おそらくは蘇州近郊の竺陽に避難していた⁵⁾ 文秉（字は蓀符，号は竺陽山人。江蘇長洲の人。萬曆三十七年（一六〇九）～康熙八年（一六六九）二月。六十一歳で卒す。國子官生）は、『甲乙事案』において、つぎのように伝える。

癸巳（十三日）、蘇州城中の義兵 起く。

時に陳湖の部する所 獲われ下獄する者有り。力士を伏して之を劫わんとし、城樓の舉火を以て號と爲す。是に於いて城中 争いて奮起し、相い與に北察院及び巡撫の公署を焚く。李延齡・土國寶 俱に斂兵（兵力を集める）し南園に屯す。城中の大姓 各々酒食を設け義兵を犒う。然れども兵は皆な徒手にして、未だ戰陣を経ず、又た火器無し。原任の守備の魯之璵・蔣若來 咸な衆を湖中に聚め、約して克復（奪回）を期す。[蔣]若來 應ぜず、[魯]之璵 獨り千餘人を率いて入城し、北兵と南園に戦う。衆 潰え、支える能わず、葑門の陽山廟の側に死す。陳湖の勇士の韋志斌も亦た焉に死す（『甲乙事案』巻下）。

蘇州城東南の陳湖を拠点としていた暴徒のなかで、逮捕されて下獄したものがでた。そのため陳湖の暴徒たちは、力士を潜伏させて、これを奪いかえそうとし、城門や樓閣を焼き合図とした。ここで蘇州城内の人たちも競ってこれに応じ、北察院と巡撫の役所を燃やした。李延齡と土國寶とは、兵士を南園（滄浪亭の南方。今の養蚕里一帯）に集めた。蘇州城内の旧家や名家などは、それぞれ酒食を整えて義兵（暴徒）をねぎらった。しかし、暴徒たちはみな素手で、戦いの経験がなかったうえに、火器も持ち合わせていなかった。もともと明の守備であった魯之璵と蔣若來とは、暴徒を陳湖に集合させて、蘇州城奪回を計画した。ところ

5) 汪澐（字は茗文，号は鈍菴・鈍翁・液遷・玉遮山樵。堯峰先生と称される。江蘇長洲の人。天啓四年（一六二四）～康熙二十九年（一六九〇）順治十二年乙未科（一六五五）二甲四十六名の進士。康熙十八年己未科（一六七九）博學鴻儒一等十九名）の『竺陽山人墓誌銘』（『鈍翁前後類藁』巻四十四・文藁三十二・墓誌銘二）によると、[父の文震孟が崇禎九年（一六三六）に歿して]、其の後九年（順治二年〔一六四五〕）、江南 内附し、君（文秉）の同産の弟の[文]秉 難に死し、君の家 遂に破る。[しかし]幸いに身を兵刃の間に脱するを得るも、意 頗る自聊せず。乃ち其の室を挈え走り文肅公（文震孟）の墓下に廬とす。墓は、竺陽に在り。天池山と相い去ること一里ばかり、林石 幽閑なり。號して名勝地と爲す。……城市の人と絶えて相い知聞せず……（『鈍翁前後類藁』巻四十四・文藁三十二・墓誌銘二・九葉・「竺陽山人墓誌銘」）。

とある。この記述のよると、弟の文秉が処刑された順治三年（一六四六）以後に、竺陽に庵を構えたように理解できる。ただし、順治二年（一六四五）の清朝の軍隊の蘇州進駐直後に、文氏の邸宅は接収され、文秉は郊外に退去せざるをえない状況になっていた。

が蔣若來は、参加せず、魯之璵が千人を率いて蘇州城に侵攻し、清朝の軍隊と南園で戦った。しかし、千人の無頼の徒は潰えて、支えることができず、魯之璵は葑門の陽山廟の側で亡くなった。陳湖の勇士の韋志斌もそこで戦死した、という。

そして、この混乱は十六日に収束する。

丙申（十六日）、蘇州城中の義師 潰ゆ。

時に舊總兵の呉志葵 黄天蕩に屯營し、郡人の張劭 之に入城して救援するを勧むるも應ぜず。是に於いて諸師 各々鳥獸散（潰逃）す。頂缸（身代わり）の僧 戦うこと甚だ力め、手づから北兵數十人を殺す。十六夜に當り、月食す。李延齡 兵をして齊門より潛出（密かに出発させる）せしめ、蠡口より望亭に繞出さし、糧船を奪い之に據る。葑墅を縦掠し、楓橋に至る。北兵の城中に在る者、亦た胥・盤一帶を焚殺す。城内外の死する者を計うるに幾ど萬人に及ぶ。河水 旬を経て猶お食す可からず。潭東の李伯含 素より武事を以て推され、是に及び衆を率い盤門に至り、遽かに水に墮ちて死す。人 咸な之を惜しむ（『甲乙事案』卷下）。

明の總兵であった呉志葵は、黄天蕩に駐屯しており、張劭が、蘇州に入城して暴徒たちに援助・救援することを勧めたが、応じなかった。ここでそれぞれの暴徒たちは潰走した。身代わりで僧侶となった人が、激しく戦い、みずから清朝の兵士数十人を殺した。十六夜で月食があった。李延齡は兵士を蘇州城北にある齊門からひそかに出し、さらに北の蠡口から西の望亭に旋回させ、糧船を奪わせた。そして、大運河上の葑墅關を掠奪して、[大運河沿いに蘇州城に戻り]、楓橋に戻ってこさせた。城内の清朝の兵は、南西部の胥門・盤門一帶を焚殺した。[その結果]蘇州城内外の亡くなった人たちは、万人にもなった。蘇州の運河の水は、十日たっても、利用できなかった。潭東の李伯含は、もともと武芸で推薦されていた。ここに至って、人々を率いて盤門に到着したところで、運河に墜ちて亡くなってしまった。人々は、それを惜しんだ、という。

文秉によると、陳湖に集まっていた暴徒は、逮捕された仲間を救い出すために蘇州に乱入したという。さらに、城内の清朝の兵は、南西部の胥門・盤門一帶を焚殺し、蘇州城内外の亡くなった人たちは、万人にも及んだと記す。

『研堂見聞雜記』では、李延齡が虐殺を行なおうとしたところ、土國寶がそれを止めたという。さらに、『薛諧孟筆記』も、李延齡ではなく土國寶が蘇州の人たちの安全をはかったと記される。また、『甲乙事案』では、李延齡や土國寶について記されていないが、清朝の軍隊が城内南西部の胥門・盤門一帶を焼き人を殺した。そのため多くの人が亡くなったと伝える。このように、当時蘇州近辺には、李延齡の伝説とは異なった内容の情報が伝わっていた。

では、当時蘇州城内にいた『吳城日記』の撰者はどのように伝えているのだろうか。続けて検討してみたい。

(3)

『吳城日記』によると、閏六月十三日の明け方、城外で砲声が起こり、民兵が入城してきた。閭門付近は焼き尽くされ（『吳城日記』の撰者は、閭門の近くに住んでいたため、近くのことを記したようだ）、役所も放火されたという。

十三日昧爽（黎明）、忽ち砲聲の六門の外に大いに起こるを聞き、城門 頓開（突然に開く）す。民兵の先ず葑門より入る有り。各々陸續と俱に進む。木を斬りて掲竿（旗竿をたてる）、間に戈矛を執り、甲冑を被る者有り。皆な白を以て頭を裹（つつむ）、^{おおかた}大都は布を用い、額に紅點を加う。手に二三の大明の旗號を持ち、「副總兵の呉聖階 蔣・陳・朱・魯の諸將を統べて入城す。精兵 雲集す」と聲言（声高に叫ぶ）す。城中の民 街衢に於いて俱に巨石及び木器^もを將^もって堆塚（堆積）す。其の意は但だ北兵の馬足^{さまた}を礙げんとす。凡ての巷口 俱に街沿いの石を聚め壘塞し、僅かに小門を留め、一人の俯首（低頭）して出入するを容^{ゆる}す。人心 惶惶（恐懼不安）たり。各々疑懼を懷く。民兵 先ず閭門の外に於いて兵舟二隻（『啓禎記聞録』は「千隻」に作る）を擊毀し、舟中の數十人（『啓禎記聞録』は「數千人」に作る）俱に斃る。有名貴要の人の在る有りと聞く。中流（流れの中央）に困しみ、其の技を施す所無きの故に因るなり。火を縦ちて閭門の吊橋を燒斷し、月城（瓮城）内に延及し、民房 俱に盡く。又た放火して府署（『啓禎記聞録』は「府縣署」に作る）及び都察院・北察院・監兌署を燒き、俱に煨燼（灰燼）に成る（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）閏六月十三日」条・二〇九頁～二一〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

閏六月十三日の明け方、突然大砲の音が蘇州の六つの門の外に起こるのが聞こえた。城門は、突然開いた。民兵は、最初は南東にある葑門から入城した。すべて次々と進攻する。木を切って旗竿をたて、その間には戈矛を執り、甲冑を着ている者もいた。すべて白色のもので頭を包んでいた。おおかたは布を用い、額に紅でしるしをしていた。二三の「大明」の旗號を手にし、「明の副總兵の呉聖階が蔣・陳・朱・魯の諸將を統べて入城した。精兵は雲集している」と声高に言った。城内の人々は、辻に大きな石や木器を積み重ねた。清朝の軍の馬を妨げようとしてのものであった。十字路沿いの石を集めてすべての路地を塞ぎ、小さな入口を用意しておき、身をかがめて出入りさせた。人々は不安にたえなかった。それぞれが疑心暗鬼になった。民兵は、まず北西の閭門外で兵船二隻を擊破した。船中の数十人は、ともに亡くなった。名のある貴人が乗船していたと聞いている。運河の中央にいたため、なすすべもなかったせいであろう。民兵は、火を放って閭門の外の吊橋を焼き落とした。そして、閭門の瓮城におよび、瓮城内の民家もすべて破壊した。さらに、蘇州府・都察院・北察院・監兌署などの役所を燒き、灰燼にしてしまった。

『吳城日記』の撰者が觀察したところ、突入してきた民兵は統制がとれていない烏合の衆で、

逮捕された仲間を救い出すのが目的であった。ただ、清政権の軍隊は、反撃せず静まり返っていたという。

予（『吳城日記』の撰者）見るに民兵の多しと雖も、皆な市井郷村の烏合にして、既に戦陣を習わず。又た漫として統緒（連携）・領（統率）無ければ、固より決して其の能く爲す無し、喧鬧（さわぎたてる）し晩に至りて漸く散去す。其の清晨（早晨）に入城する時節に^{あた}方り、居民を呼び飯を具えて接濟（物質的な援助）せしむ。戸を閉ざす者有れば輒ち箠撃罵詈を加う。閭門内の一路（途沿い）の民家 多く簞（簞）壺漿を道旁に設け、其の飲啖に供す。^{まこと}良に亦た已むを得ざるなり。然れども徐て其の兵端（戦争の事端）を究めるに、祇だ陳湖の眾を聚めて靖ならざれば（治安がよくないので）、兵を發して往征するに、數十人を傷つけられ、亦た六七の亂民を捉獲（逮捕）し獄に繋ぐに縁（縁）る。是の日、陳湖の人 實に此の舉を倡え、眾を率いて獄を破り、繋囚（^{うばいと}）を以て去る。此れ其の本謀なり。乃ち四方 風を聞きて（傳聞を聞く）して之に應ずるは、總じて一時の乘興の妄動なり。^{ママ}旅（^{いそ}旋）いで進み、^{ママ}旅（^{いそ}旋）いで退く。攻圍戦守の能有るに非ず。即ち土（土國寶）・李（李延齡）二公暨び各官は亦た俱に府庠・端光寺の前に團聚（聚集）し、兵を屯めて自衛す。未だ奇もて勝を制し電撃颯馳の快舉有るを見ざるなり。是の夕べ、街坊 榔（拍子木）を敲き、放砲・呐喊（大聲でさけぶ）の聲 絶えず、大約 皆な無頼の爲す所なり（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）閏六月十三日」条・二一〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

わたし（『吳城日記』の筆者）が見るところ、暴動を起こした民兵は多かったけれども、すべて町や村の烏合の衆であり、戦闘の訓練を受けたものではなかった。さらに、漫然としてお互いの連携や統率がとれておらず、もとより決して成す事はなかった。騒ぎ立てて、夜になってばらばらに退いた。早朝に入城するにあたって、住民を呼び出し食事の援助をさせた。戸を閉ざしている者がいると、棍棒で叩いて罵詈雑言を加えた。閭門内の道沿いの民家は、食事を道端に用意して、その飲食の要求に応じた。ほんとうに仕方がないことであった。しかしながら、そのすべての暴動の端緒を考えると、ただ蘇州城南東にある陳湖に暴徒が聚まり治安がよくなかったので、兵を發して鎮圧に往かせたところ、數十人が傷つけられ、六七名の亂民を捕えて獄に繋いだことに原因するのである。この十三日、陳湖の亂民は、清朝の軍のこの行為を唱えて、人々を率いて監獄を破り、繋がれていた囚人を奪い去っていった。これこそが、本来の目的（本謀）であった。かえって四方で伝聞を聞いて、その騒乱に応じたのは、総じて一時の調子に乗った妄動である。急ぎ進み、急ぎ退くのは、戦いの仕方を知らないためである。こうしたなかで、土國寶・李延齡の二公および各官はともに城内南西部の府學・端光寺の前に集合し、軍隊を集めて自衛していた。また、奇策を出して勝利を呼び込み、電撃的に駆け回るような胸のすくような行動は見られなかった。この日の夕べは、街頭で拍子木を敲き銃声や叫ぶ声が絶えなかった。こうしたことは、だいたい、無頼の輩の

行ったものである。

蘇州の人々はこの混乱が、清政権の怒りに觸れたことを知り、殺戮は免れないだろうと考え、城内から逃げだす。

守分(本分を守る)の良民 已に上の怒りに觸れるを知り、鋤誅(殺戮)を免れざるを恐れ、倉卒に挈家(家眷を引き連れる)して遠く遁る。向來(即刻),李公(李延齡) 令有りて、郷紳士庶 妻子・貨貨(資財貨物)を携えて出城を許さず、違ひし者は斬を論ず、と。[しかし]此の際、六門 洞開し、復た禁令無し。出る者は踵もて相い接す(『吳城日記』卷上・「乙酉(順治二年)閏六月十三日」条・二一〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊)。

本分を守っていた良民たちは、暴動がお上の怒りに触れたことを知り、殺戮を免れないことを恐れて、急いで家族を連れて遠くに遁れた。即刻、李延齡は、郷紳士庶が、妻子・家財を携えて城外に出るのを禁じ、違反する者は死刑に処す、と命令を出した。しかし、この時には、蘇州の六つの城門は開かれており、出入りを禁ずることもなかった。逃げ出す者は、踵を接した。

閏六月十四日には、叛乱の兵がいなくなった。そして、周荃は蘇州の人たちに、この騒動は、城内の人々と関係がないと言わせた。そのため、李延齡もすこしは怒りをおさめる。

十四日、天曉、既に重兵の壓境無し。城中 兆姓の遷る能わざる者あり。[そうした人たちに向かって]、周子靜(周荃。字は子靜) 授意(言い含める)して、群聚して軍門に往き懇求し、其の倡亂(造反する)は、城市の小民に非ずと辨ぜしむ。李公(李延齡)

始めは盛怒すと雖も、後は少々霽顔(怒りをおさめる)す。是の日の辰刻(午前八時)、仍お「大明義師」の旗を執る者二三千人有り。吳趨坊の南上より飲馬橋に至る。北兵數騎の衝(突進)し下るに遇いて、便爾として奔散す。僅かに一(ひとり)の隊を失うの北兵を中途に傷つくのみ。未(午後二時)より日午(中午)に至り、相い率いて退き閭關より出で去る。晩間、李(李延齡)・土(土國寶)二公 各々出示して民を安んじて云う、「此の舉を察知するに、係れ楊監軍(楊文驄)の餘孽 海寇を勾連(結託)して祟を爲す。大兵 到るの日に追剿(追撃殲滅)せん。城中の良民 必ずしも驚恐せず。但だ協力(力を合わせて)して守城し、奸細を緝拿(搜捕)するを煩わすのみ」と(『吳城日記』卷上・「乙酉(順治二年)閏六月十四日」条・二一〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊)。

十四日、朝になるともうおおくの亂民はいなくなってしまった。城内では逃げだすことができなかった人たちがいた。周荃はもそうした人たちに言い含めて、集まって軍門に往き必死になって、この造反は城内の人たちが行ったものではないと言い訳させた。李延齡は、はじめは激怒していたものの、のちにはすこし怒りをおさめた。この日の午前八時には、なお「大明義師」の旗を持った二三千人がおり、[西北の閭門近くの]吳趨坊の南から[西南にある]飲馬橋に至った。清朝の數騎の騎馬の突撃に出くわし、逃げちらかってしまった。ただ部隊からはぐれた一人を道で傷つけただけであった。正午から午後二時までには、引き連れて閭

門から退き出て行った。夜には、李延齡・土國寶の二公が人々を安心させるための告示を出して「この混乱を察するに楊文驄の残党が海上の盗賊と気脈を通じて禍を引き起こしたものである。大軍がやってきた日には、追撃掃討する。城内の人たちは、必ずしも恐れおののくことはない。ただ力を合わせて蘇州を守り、間諜を捕まえるというめんどうをかけるだけである」と述べた。

閏六月十五日に、清政権は動乱の発生源となった蘇州城の南東にある陳湖に向かって派兵する。軍は、城内南西の駐屯地を少し北上して、現在の十全街沿いに東にむかい、南東にある葑門から出るコースをとる。このコースでは、掠奪や殺戮の被害がきわめて多く、西北附近（閶門）では混乱がなかったこととおおきく異なった。

十五日、撥兵（派兵）して葑門より出るに、其の途に在りて横暴（強横凶悪）たり。知る所有の一事は「以下のようなものである」。蘇人の王惠伯 現〔任の〕軍門（総督もしくは巡撫）の標下（部下）の職官爲り。兵丁 其の家に涌入し、家屬一人を執え、斬りて三段にし、其の婦女數口を擄う。〔王〕惠伯 亦た縛を被り、將に刃を加え、財物・細軟（貴重品）もて掠盡されんとす。適たま軍門の正差官（高官から派遣された小官吏）

來りて王君（王惠伯）の領する兵を喚ぶ。兵 令を聞き乃ち縛を釋き、并せて其の婦女を還す。然れども賁賄（財物）は烏有たり。〔王〕惠伯 急ぎて居を徙し避け去る。城中の東南の隅は、其の搶掠（掠奪）・淫殺（殺戮）の害 殊に多し。西北の擾無きが如きに非ず。一城の内、便ち天淵を隔つ。真に幸・不幸有り（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）閏六月十五日」条・二一〇頁～二一一頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

十五日に兵を移動させて南東の葑門から出したが、その途中、たいへん横暴兇悪であった。わたしが知っている事例のひとつは、つぎのようなものである。すなわち、王惠伯は、現任の軍門（総督もしくは巡撫）の標下（部下）の職官（官員）であった。だが兵士がその家に溢れるように入り込んでゆき、家人一人をとらえて、三つに断ち切り、その婦女数人は虜となった。王惠伯自身も縛り上げられ、刀を加えて、財産・貴重品を掠奪されそうになった。たまたま軍門（総督もしくは巡撫）から派遣された小役が王惠伯の差配している兵士を呼んだ。王惠伯に対して狼藉を加えていた兵士はそれを聞き、縛を解き、その婦女を返した。しかし、財産はすべてなくなってしまった。王惠伯は、急いで居を移し避難した。兵が移動した東南附近（葑門近辺）は、掠奪や殺戮の被害がきわめて多く、西北附近（閶門近辺）の混乱がなかったこととは異なる。同じ城内でも天地ほどの開きがあった。ほんとうに幸・不幸があったのである。

（2）で検討した『甲乙事案』で言及されるように、蘇州で大量の人が亡くなったと蘇州近郊の知識人たちに伝わったことや『吳城日記』の著者が伝えるように、閏六月十五日に東南附近（葑門近辺）で掠奪・殺戮が行われ、西北附近（閶門近辺）ではあまり混乱がなかったということが、李延齡が全城虐殺を部分的に止めさせたという伝説に発展していったのでは

ないか、と私は考える。

ただし、(2)で検討した『研堂見聞雜記』や『薛諸孟筆記』では、李延齡が虐殺を行なうとしたところ、土國寶がそれを止めたという。当時、蘇州近郊には李延齡と土國寶との役割が入れ替わって伝わっている。また、すでに検討した地方志やこの『吳城日記』を見ても、実際に蘇州の人々の命を救おうとしたのは周荃であると記されている。なのになぜ李延齡が全城虐殺を部分的に止めさせたということになったのであろうか。続けて検討してみたい。

(4)

李延齡が蘇州に滞在した期間は、順治二年（一六四五）六月四日から、順治二年八月一日までの、閏六月をはさんだ三か月である。出発するにあたって、蘇州の人々は、李延齡の生祠を建てる。

[七月] 廿二日、士民 李公（李延齡）の生位を置き、威儀（儀式用の服装）・香花（香と花）・鼓吹（演奏）を具う。府・縣の官役 先ず[閭門近く]の泰伯廟に齊集して頓^{とど}まる。午間（正午）に大營の内に迎え往く。各官及び士民 拜賀し^{おわ}訖り、随い閭[門]を出で、虎丘の新しく建つる生祠に迎え置き安位す（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）七月二十二日」条・二一六頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

順治二年（一六四五）七月二十二日、人々は李公（李延齡）の生位を配置し、威儀（儀式用の服装）・香花（香と花）・鼓吹（演奏）をととのえた。府や縣の役人は、まず閭門近くの泰伯廟に集合してとどまり、正午になって軍營に李延齡を出迎えにゆく。各官や人々は拜賀して、李延齡に付き従って閭門から虎丘に建てられた生祠に李延齡の生位をお迎えして安置した、という。

この時に刻された碑文が「欽命總督刑部侍郎李公再造吳民碑」であり、「再造吳民」という語句が記されている。いまは原碑を見ることができないが、李根源（字は印泉、又の字は養溪。雲南騰沖の人。一八七九年～一九六五年）の『虎阜金石經眼錄』（民國十五年（一九二六）王謇跋：『曲石叢書』所収）によると、「欽命總督刑部侍郎李公再造吳民碑」は、つぎのようなものであった。

欽命總督刑部侍郎李公再造吳民碑

公 諱は延齡、號は壽籌、今の諱は率泰。師を統いて江南を平定するに、刃を血ぬらず（殺戮せず）。海寇 亂を爲すも、重ねて反側（二心を抱くもの）を消し、民 用って再生す。敬みて斯^{つつし}の石に勒（雕刻）し以て盛事を誌し、吳の民の子孫 公の徳を戴くこと世世忘れず。順治二年七月穀旦（吉日）、戸部右侍郎の申紹芳・刑部郎中の申繼揆・中書舍人の申繹芳・安撫蘇州府通判の周^{ママ}志荃（周荃）・福寧知州の沈幾・工部主事の申繼芳・廣西按察司副使の朱邦楨・兵科給事中の吳适・工部主事の沈^{ママ}緒芳（申緒芳）・蘇州府同

知の王志古・禮部主事の湯有慶・松江府海屯同知の周葵・太倉州知州の徐樹藩・工部員外郎の申騰芳・中書科舎人の申績芳・陝西布政司參政の郭忠宁・大理寺寺丞の錢位坤・河南汝寧府總捕廳の吳好古等立つ。撫治下の吳郡の沐恩の諸生の丘陳益・陳赤頓 首に石に勒す。

十二行、行ごとに十六字。高さ七尺。山塘の李率泰の祠に在り(『虎阜金石經眼録』不分卷・二十四葉～二十五葉：民國十五年(一九二六)王謩跋：『曲石叢書』所収)。

李延齡は、江南を平定するのに人を殺さなかった。海寇が叛乱を起こしたが、二心を抱くものを抹殺し、人々は再生することができた、という。この「再造吳民」という言葉が、李延齡の伝説の形成におおきくかかわっていった、と考えられないだろうか。

さらにいうと、この碑文を立てた人物として名前が挙がっている十八人のうち七人の申氏全員が明の萬暦年間に大學士であった申時行(字は汝默、号は瑤泉、晩年に休休居士・蘇庵主人と号する。諡号は文定。江蘇長洲の人。嘉靖十四年(一五三五)八月十六日～萬暦四十二年(一六一四)七月十九日。嘉靖四十一年壬戌科(一五六二)の状元直系の孫にあたる。また、朱邦楨・吳适・湯有慶の三人と申氏一族とは姻戚関係にあった(乾隆四十五年(一七八〇)序『申氏世譜』による)。

土國寶着任の直後は、土國寶の命じた蘇州城内の読書人の呼び出しに応じなかったために、進士である申紹芳の家が三十名の兵士によって取り囲まれた(『吳城日記』卷上・「乙酉(順治二年)六月初七日」条・二〇七頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊)。ところが、李延齡の幕下の役人と申紹芳との間に何らかの関係があり、敵対勢力の対象からは除かれたと『吳城日記』は伝える。

[順治二年六月九日] 申家の守兵(清政権による監視の兵士) 忽ち令箭(伝令)有りて撤去す。總督刑部侍郎の李延陵(李延齡)の幕下に、兵部職方^{ママ}[清吏]司を任せらるる者有るに因る。原籍は山東なり。乃ち青門(申紹芳：字は維烈、号は青門。蘇州長洲の人。萬暦十九年七月十日(西暦：一五九一年八月二十八日)～順治十年正月十日(西暦：一六五三年二月七日)。萬暦四十四年丙辰科(一六一六)三甲二〇七名の進士)の舊治下なるのみ(『吳城日記』卷上・「乙酉(順治二年)六月初九日」条・二〇七頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊)。

順治二年(一六四五)六月九日、申氏の邸宅を監視していた兵士は、伝令があり撤退した。總督刑部侍郎の李延齡の幕下で兵部職方清吏司に任命された者がいたことによる。この人物は、山東出身であり、申氏一族で申時行の孫にあたる申紹芳が、崇禎元年(一六二八)に山東分守道濟南道副司に擢せられた時の配下であった、という。

『薛諧孟筆記』では、李延齡の祖父が、申紹芳の叔父(申時行の長男)の申用懋に世話になったからであるという。

……尤も駭く可き者は、李侍郎(李延齡)の祖父 [申時行の長子の] 申玄渚司馬(申用懋：

字は敬中、号は玄渚、晩年に閒閒居士と称す。蘇州呉縣の人。嘉靖二十三年（一五四四）二月二十五日～崇禎十一年（一六三五）十月十八日。萬曆十一年癸未科（一五八三）二甲二十一名の進士の恩を受く。故に青門（申紹芳）と世好を叙す……（『薛諸孟筆記』下册・二葉・「閏六月十四日記」条）。

順治二年（一六四五）閏六月十四日の時点で武進にいた薛栄までが李延齡と申氏一族との関係を記録していることから考えると、申氏一族がすばやく清政権に協力したことは、かなり評判になっていたのであろう。申氏一族は、李延齡との関係を利用し、清政権に協力することで、一族の保全をはかったと推測できる。

わずか三か月しか蘇州に滞在しなかった李延齡であるが、その間に、蘇州の人々の生命の保全にたいへん努力したとなれば、その李延齡に協力した申氏一族も、間接的であるかもしれないが蘇州のおおくの人たち命を守る手助けをしたことになる。また、進駐してきた清政権にいち早く協力したことに対しても、ある程度の言い訳にもなる。

そのため、申氏一族としては、李延齡を「再造呉民」した人物として、できるかぎり顕彰する必要があった。李延齡に対する評価が高まれば高まるほど、申氏一族も明朝に忠義を尽くさなかったという汚名⁶⁾を少なくすることができるからである。

このように考えることができるならば、「再造呉民」の碑文と申氏一族の顕彰の結果、土國寶ではなく李延齡が蘇州の人々の命を救ったという伝説になっていった、とすることはできないだろうか。

しかしながら、実際に蘇州の人たちの生命の保全に努力したのは、周荃である。また、申氏一族による李延齡の顕彰がどのようになされていったのかについては、いまのところよくわからない。

なお、『呉城日記』によると、順治四年（一六四七）六月七日には、土國寶も生祠が建てられたという（『呉城日記』巻中・「丁亥（順治四年：一六四七）六月初七日」条・二三一頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

しかし、土國寶の祠は陸肇域・任兆麟の『虎阜志』（乾隆五十七年（一七九二）鐫）や顧祿の『桐橋倚棹錄』（道光二十二年（一八四一）刻）などには、記載されていない。おそらく、

6) 民国期に高官を歴任した李根源は、『虎阜金石經眼錄』で李延齡の三つの碑文を紹介した後、つぎのような意見を述べている。

上の三石に據りて之を觀るに、當時の呉中の士氣、抑そも何ぞ衰靡（衰敗）することは是の如きや。蘇志（『蘇州府志』）に申紹芳・呉适を明の人物傳に、申繼揆・申繹芳・[申]績芳・郭忠宁を明の藝文志中に列するは、實を失す。去秋、余（李根源）舟を新塘橋鴨脚浜に泛べ、徐文靖（徐汧）を弔う〔割注：並びに明の忠義劉公旦先生曙の墓を訪ぬ〕。文靖（徐汧）水に赴きて國に殉ずるの夜は、即ち申紹芳の輩、李率泰・土國寶の入城を迎うの日なり。文靖（徐汧）の死するの日は、乙酉（順治二年〔一六四五〕）六月と爲す。兩碑は乙酉（順治二年〔一六四五〕）七月に建つ。呉の掌故を攷うる者は、知らざる可からざるなり（『虎阜金石經眼錄』不分卷・二十七葉～二十八葉：民國十五年（一九二六）王謬跋：『曲石叢書』所収）。

乾隆五十七年（一七九二）の時には土國寶の祠は消滅していたと考えられる。土國寶が順治八年（一六五一）に貪官として弾劾され自經したと関係するかもしれない。

おわりに

以上、清政権から派遣された高官の李延齡が、順治二年（1645）閏六月に蘇州で行われようとした全城虐殺を部分的に止めさせたという伝説について考察した。当時の蘇州城内にいた人の記録を検討した結果からすると、閏六月においては清政権による虐殺の証拠は見当たらなかった。ただ清政権の軍隊が蘇州城南部の道路を通過した時に掠奪行為が行なわれたと記されているのみである。私は、この掠奪行為が、後に清政権による虐殺行為として伝説になっていったのではないかと考えている。また、なぜ李延齡が伝説の主人公となったのかについては、後まで残された李延齡の祠の碑文に「再造呉民」とあること、そしていち早く李延齡（＝清政権）に協力して自家の存続をはかった申氏一族による顕彰が影響しているのではないだろうか。

本稿は、和歌山大学経済学部平成 25 年度研修専念制度を利用した研究成果の一部である。

Concerning the Legend of Li Yanling in 1645

Kunio TAKINO

Abstract

This paper is an investigation into the legend concerning the high-ranking official Li Yanling who, having been dispatched by the Qing regime to Suzhou in 1645 in an attempt to massacre the entire city, is said to have partially halted the massacre. An investigation of historical materials from the time has found no evidence of a massacre on the part of the Qing regime. However, when the army of the Qing regime passed through the streets of inner Suzhou, it engaged in looting. This paper reveals that the looting carried out by the army of the Qing regime was subsequently transformed into a legend.